安達峰一郎　生誕150年

常設国際司法裁判所所長として審理を主宰する（1931年）

安達峰一郎（1869～1934年）の名に、何を思い起こされるだろうか。現在の山辺町に生まれ、第一次世界大戦後に創設された国際連盟の理事会議長や日本代表を務めたのち、常設国際司法裁判所所長として世界的な信望を集め「世界の良心」と讃えられた偉人――。

関心の深い方なら山形県師範学校中学師範学予備科（のちの山形中学）に学んだこと、満州事変の後、国際秩序の破壊者とみなされてゆく日本との乖離に苦悩しながら、オランダで病没したことに思い至るかもしれない。

安達がオランダの国葬に付されたのは1935年。人の一生に照らせば遠い過去かもしれないが、実際はまだ85年しか経っていない。にもかかわらず、山中・山東の同窓生でさえ、現実と切り離された伝説上の人物のようなイメージを抱いてしまうのはなぜなのだろうか。

安達は例えば、幕末の志士などではない。今日に引き継がれた国際機関、国際裁判の原点となる国際連盟、常設国際司法裁判所の礎を築き、その光と影を映し出す黎明期を、身を挺して支えた現代人なのに、である。

振り返ると、次なる大戦の本土空襲や原爆投下の重い記憶が厚い壁となり、戦前の歴史に対する私たちの関心や思考を遮ってきたことに気づくだろう。軍国・日本の敗戦を「一億総ざんげ」で総括する一方、当時の軍国主義とは明らかに一線を画し、国際連盟の大国・日本が果たした国際秩序の擁護者としての貢献を体現する真に誇るべき人物までも、なぜか消し去ってしまったのだ。安達の業績を詳らかにすることで、かつての軍国主義、国家主義の過誤がより鮮明によみがえるからだろうか。

外交官出身の安達は母国の国益に資するその本分を片時も忘れなかった。公平無私を求められる国際裁判官に転じた後も職務を最優先させ、回想録などを一切残さなかった。確かにその潔さが再評価の間口を狭めてきた。

しかし、国際外交官として第一次大戦後の欧州の秩序回復に尽くした数々の実績、国際法学者として武力によらない紛争解決をめざす国際裁判制度の創設に果たした功績は近年、国際政治や外交史、国際法の第一線の研究者らの熱い視線を浴びて刻々、解き明かされつつある。

安達の死後、鏡子夫人が設立した東京の「安達峰一郎記念財団」（鈴木正貢理事長）と山辺町の有志による「安達峰一郎博士顕彰会」（遠藤直幸会長）を通じて、その生涯は連綿と語り継がれてきた。二人の代表者をはじめとする山中・山東同窓生の熱意が正当な再評価への伏流を涸らすことなく、今日まで守り続けてきたのだ。

私は今世紀初頭、全国紙のローマ特派員として中東や旧ユーゴの戦場を取材し、イラク戦争では米軍の従軍記者を務めた。そしてイスラエル・パレスチナ衝突、イスラム国による混乱などの現代の国際問題は、二つの世界大戦をつなぐ「大戦間期」にまで遡る歴史的視点を持たなければ、正しく理解できないことを思い知らされた。

目下の国際社会には、大戦間期後半の悪しき国家主義を彷彿とさせる「自国第一」主義がはびこり、米英さえも浸食されつつある。この流れが強まれば、二つの大戦という計り知れない代償を支払って手にした「戦争は違法」という現代の常識までも一挙に瓦解しかねない。

激動の時代、安達が守り抜こうとした国際協調の思想を知ることは、混迷の現代に新たな光を投げかける。その生誕150年にちなむ催しが昨年、東京と山形で開かれた。今年は記念財団創設60周年にあたる。現代史に深く刻まれた安達の足跡を知らしめるため、今こそ、山中・山東同窓の方々の理解と助力を仰ぎたい。

安達峰一郎記念財団理事　井上　卓弥（継世会）

第9回国際連盟総会で各国代表と会談する（中央・1928年）

スペイン・マドリッドの国際連盟理事会で議長を務める（中央・1928年）

※写真はいずれも安達峰一郎記念財団所蔵

編集後記